

# 與謝野晶子と高島屋百選会

Akiko Yosano in Takashimaya Hyakusen-Kai (the special event of Takashimaya Department Store)

大久保 春乃  
(Haruno OKUBO)

キーワード：與謝野晶子、高島屋百選会、着物、短歌

Key Words : Akiko Yosano, Hyakusen-Kai (the special event of Takashimaya Department Store), kimono, Japanese poem of thirty-one syllables

## I はじめに

與謝野晶子は明治11年(1878)、大阪の堺に、老舗の和菓子屋の三女(鳳志よう)として生まれ、幼い頃より古典文学に親しんで成長した。明治33年(1900)、22歳で、與謝野鉄幹の主宰する新詩社に入会し、機関誌「明星」に短歌作品の発表を開始する。翌明治34年(1901)に第一歌集『みだれ髪』を出版し、当時の文学界に一大センセーションを巻き起こした。

その後、鉄幹と結婚した晶子は、昭和17年(1942)に63歳で没するまで、歌人として歌を詠むことはもとより、童話・童謡・詩を創作するほか、社会評論・歌論・小説・随筆等も数多く執筆し、さらには、『源氏物語』、『栄花物語』、『徒然草』等、古典文学の現代語訳も手がけている。それらは順次出版され、生涯に歌集22冊、評論集等20冊など、膨大な数の著作を成した。私生活においては、13人の子どもを産み(1人は死産、1人は生後2日で死亡)、5男6女を育てる母親でもあった。

與謝野晶子はこのように、日本を代表する歌人・文学者として、また、妻であり母であるひとりの女性として活躍したのである。そんな晶子が携わった、やや異色とも思える仕事のひとつが、高島屋の新作和服の催事である「百選会」の顧問であった。

晶子は大正7年(1918)頃より「百選会」の事業に参画し、翌年の第13回「百選会」以降、流行色の命名を行っている。さらに大正10年(1921)から病に倒れる昭和15年(1940)まで、約20年にわたって、着物や帯を題材とした歌を発表し続けた。発表媒体は、初めは「百選会」の「ご案内パンフレット」であり、大正11年(1922)より「百選会図録」、14年以降は、図録のほかに、京都・大阪・東京の各店宣伝部で制作され、顧客向けに配布されたカタログ、「百選会グラフ」も加わった。歌の総数は463首(及び詩が7篇)にのぼる。それらは、

---

おおくぼはるの：目白大学短期大学部生活科学科

晶子の歌集・詩集にはほとんど収録されていないため、これまでは『百選会百回史』<sup>1)</sup>等において一部が読めるばかりの、いわば幻の作品群であった。平成27年(2015)、高島屋資料館によって整理され、企画展の開催とともに、『与謝野晶子と百選会 作品と資料』<sup>2)</sup>としてまとめて出版されることで、初めて世に出たのである。

「百選会」に関する先行研究としては、百貨店が主導する、服飾の流行のありかたを明らかにしたものに、青木美保子氏の「大正昭和初期の服飾における流行の創出—高島屋百選会を中心に—」<sup>3)</sup>がある。また、「百選会」の成り立ちを明らかにしたものには、山本真紗子氏の「戦前期の高島屋百選会の活動—百選会の成立とその顧問の役割—」<sup>4)</sup>がある。加えて、平成27年の高島屋資料館の資料公開後の研究には、高島屋の社員として本社図案室(のちに美術部)に所属され、「百選会」の図案制作等の仕事に長く従事された、表田治郎氏の「きもの讃歌—与謝野晶子と百選会」<sup>5)</sup>がある。そこでは30首の歌が抄出され、それぞれの歌と、詠われた商品との照合が丹念になされている。さらに最近の論に、歌人の今野寿美氏による「与謝野晶子と百選会」<sup>6)</sup>がある。晶子が命名した流行色とともに9首の歌の解説がなされているが、おおむねは、平成27年(2015)の4月から6月まで大阪高島屋で開催された、高島屋資料館の企画展「きもの讃歌 与謝野晶子と百選会」の紹介に重きを置く内容であった。

筆者は先年、拙著『時代の風に吹かれて。—衣服の歌』<sup>7)</sup>の一章を用いて、晶子が詠った衣服の歌について論じたが、「百選会」の歌には残念ながら触れることができなかった。このたび「百選会」の歌をまとめて読んでみると、一百貨店の和服催事という特殊な場で詠まれた歌とはいえ、その1首1首は、たしかに晶子が心血を注いだ「作品」であった。晶子はどのような思いで463首もの歌を詠み続けたのだろうか。また、それが高島屋に求められ、読者にも受け入れられ、20年の長きにわたった理由はどこにあったのだろうか。

本稿ではそうした点に思いを致しつつ、與謝野晶子という人間に一歩踏み込んで、同時代に発表された詩歌作品や随筆等にも広く目を配りながら、晶子が「百選会」と関わった初期の時代、大正末期の歌を読み解いてみたい。

資料としては、「百選会」の歌については、先にあげた『与謝野晶子と百選会 作品と資料』を、晶子のその他の詩歌、随筆等の作品については、『定本與謝野晶子全集』(講談社)を用いた。さらに、『百選会百回史』、当時の新聞・雑誌記事、晶子と同時代を生きる人々の、随筆・書簡等を参考とした。

## Ⅱ 「百選会」の歴史と実態

本論に入る前に、「百選会」とはいかなるものであったのか、その歴史と実態をまとめておく。

高島屋は天保2年(1831)に、京都において木綿商として創業した。進取の気性をもって、新しい染織品の開発に熱心に取り組み、創業から「百選会」が始まるまでの80余年の間には、様々な懸賞募集を行ってきた歴史がある。例えば、明治24年(1891)の「外国向け袱紗図

案」、翌25年の「着尺の柄の意匠図案」、37年（1904）の「色染」など、枚挙に暇がない<sup>8)</sup>。

この当時の高島屋を知る人物の一人が、画家の津田青楓である。青楓は明治30年に18歳で京都市立染織学校に入学したころの高島屋について、自伝『老畫家の一生』に、次のように記している。

後に巨匠といはれる程になつた栖鳳さんにしても、芳文さんにしても、華香さんにしても、その頃は皆高島屋の仕事をしてゐられた。（中略）袱紗の繪とか、裾模様とかいふやうな職人に近いやうな仕事をして生計を支へながら、次第に才能を發揮する人が多かつた。高島屋の染織部はまるで京都の大家を育成する苗床のやうなものであつた。（中略）高島屋の仕事が青年画家にとつて一つの誇<sup>ママ</sup>でもあつた<sup>9)</sup>。

文中の「栖鳳」は西村栖鳳、「芳文」は菊池芳文、「華香」は都路華香を指す。当時の高島屋は、このように、常に多くの新進気鋭の画家を抱えて、新しい染織図案の創出に努めていたのである。その延長上に生れたのが「百選会」であつた。

「百選会」の前身となつたのは、明治39年（1906）の6月に行なわれた「ア・ラ・モード新案染織品」の募集である。全国の業者に広く呼びかけた結果、じつに1025点の応募があつたという。審査によって選ばれた染織品は、同年の秋に、「第1回ア・ラ・モード陳列会」として、京都・東京・大阪・神戸において展示・販売された。この陳列会は、明治42年（1909）まで継続し、その後「百選会」と名称を変える。命名したのは当時の京都店長、飯田政之助で、「百選は万選に通じる。一が百になり百が万になって生々發展する」の意であるという<sup>10)</sup>。

第1回の「百選会」は大正2年（1913）1月、それ以降は春と秋、1年に2回のペースで開催された。当初は単なる「新機軸品募集」であつたが、第11回（大正7年）より、毎回異なるテーマが掲げられるようになる。たとえば第11回のテーマは「新気分の花鳥模様」で、その趣意は「科学の応用に成れる新機軸の染織物」であつた。第13回（大正8年）より「流行色」が選定され、第17回（大正10年）からは、テーマに沿った「標準図案」も発表される。そののち第22回（大正12年）以降は、毎回のテーマが「一科」「二科」の二本立てとなる。「一科」は国粹趣味、すなわち伝統的な意匠であり、「二科」は国際趣味、海外美術文化を取り入れた独創的な意匠であつた<sup>11)</sup>。

「百選会」は平成6年（1994）の第183回まで続いたが、その礎はこのように、年月をかけて、徐々に築かれていったのである。

じっさいに「百選会」は、次のような流れですすめられた。まずテーマを決め、それに見合った流行色と標準図案を定めた上で、「趣意説明会」を開催して全国の染織業者に告知し、作品を募る。応募された作品から入選品を選び、その中から優選品を決定する。そうして製品化されたものが、「百選会」において展示・販売の運びとなるのである<sup>12)</sup>。

### Ⅲ 與謝野晶子の歌を読む

#### 1 第17回春の「百選会」

##### (1) 「春の歌」より

與謝野晶子は大正10年(1921)3月の、第17回春の「百選会」に、初めて詩歌を発表している。「春の歌」と題された一連、19首の巻頭は次の1首である。

わたつみのうしほの色を上に着て風流男達へものいひてまし

「わたつみのうしほの色」とは、この回に選定された流行色、春潮色・嫩草色・曙霞色のうちの一色、「春潮色」である。ひらがな表記のやわらかな和語から、1首はゆったりと詠い出される。第4句目の「風流男」からは、おのずと「うつせみの我が薄ごろも風流男に馴れて寝るやとあぢきなき頃」<sup>13)</sup>が思い出される。晶子には「源氏物語礼讃歌」という、源氏五十四帖を詠んだ一連があり、これはその中の第三帖「空蟬」の歌である。「源氏物語礼讃歌」は、大正11年(1922)の第二次「明星」1月号誌上において初めて活字化されるが、その数年前から、晶子が折々に揮毫したことで知られている。光源氏をして風流男、という認識は、『源氏物語』の現代語訳を手がけた晶子にとっては思い入れの深いものであった。

掲出歌にもどると、ここで晶子は、さあ、春光にきらめく青々とした海の色の着物をまとして、光源氏のような、都の風雅な男たちにも申しましよう、世の乙女たちを鼓舞している。「春の歌」一連の5首目、「この春の少女椿の総模様誰れ着て練ぞ都大路を」も、同様の心情であると言えるだろう。そのあとに続くのは、次の歌である。

あてやかに咲ける銀糸の白蘭の花をおさへし錦繡の鳥  
(柳)  
 友染は柳の枝のなびくよりさらにやさしき波つくるかな  
 あ、やよひ人の子よりもいちやく嫩草色の袖ふりてこし

晶子は着物や帯を目の当たりにしながら、刺繍を、染めを、織りを、とりどりの色を、自在に詠っている。1首目は銀糸で縫いとられた白蘭の上に、錦の鳥が降り立った、まことに手の込んだ刺繍である。2首目は友禅染の着物だろう。あるかなさかの風にやさしい波となる柳のみどりが、手描きの筆によって細やかに描かれた様を伝えている。3首目は流行色の「嫩草色」を詠み込んでいる。人の子よりも早くおいで、と呼びかけているのは「やよひ」三月。それは、春の女神の「佐保姫」とも言い換えることができるだろう。同じ第17回に、歌とともに発表した1篇の詩のタイトルが「佐保姫」であった。それは次のように詠い出される。

やよひの朝の佐保姫は、／嫩草色のうすぎぬを／髪の上より靡かせて、／うぐひすの音を聞きながら、／柳の枝を見上げたり。／／…

誰よりも早く季節を先どりして振られる袖の色も、佐保姫がなびかせるうすぎぬの色も、どちらも「嫩草色」なのであった。

これらの詩歌は、世の多くの人々が『みだれ髪』以来なじみを深めている晶子の詠風である。豊かな古典の知識を持ち、着物地や帯地、染め、織り、絞り、刺繍等の技法や名称にも明るい、晶子ならではの作品と言えるだろう。「百選会」のパンフレットを開いてこれらの詩歌

と出会い、胸をときめかせた当時の女性たちの表情が想像される。

## (2) 讃歌序より

與謝野晶子は「百選会」に詩歌を発表するにあたって、次の一文を掲げている。

さんかのじよ  
讃歌序

現代の生活ハ文化の実現に最上の価値を置く。文化の意義の重要なる一つハ、<sup>(ママ)</sup>断えず人工の美を創造して止まざることなり。かくて今日の人ハ個人の内にある創造能力を自由に發揮して、万人享樂の交響樂に参加することを光榮とするに到りぬ。この理想を日常生活に実現する時、染織刺繡の技術に対しても新意を出だすことハ、当然の努力なるべし。高嶋屋呉服店がこの三月に催したる春季百選会ハ、我国に於ける図案家と工人との妙技を集めて、折からの百花と<sup>(ママ)</sup>研を競へり。典雅なる伝統に養はれながら清新の趣致を案出せるは、謂ゆる新倭<sup>いは しんやまと も やう</sup>模様の名に背かず、観る者をして、人工の美の能く自然の美に打勝つことを嘆賞せしめぬ。<sup>ここ</sup>爰に書けるわが歌ハ、いさゝかそれに対する感謝の心<sup>ひとはし</sup>の一端を述べたるのみ。

大正十年四月 與謝野晶子

ここに登場する「新倭<sup>しんやまと も やう</sup>模様」は、前年からの「百選会」のテーマである。第15回（大正9年3月）が「新倭模様」、第16回（9年10月）が「新倭模様を創造せよ」、第17回（10年3月）が「新倭模様に終始すべし」、第18回（10年10月）が「新倭模様の大成期」と推移している。「典雅なる伝統に養はれながら清新の趣致を案出せる」という「新倭模様」は、まさに「百選会」の目指すところであったろう。

その「清新の趣致」のひとつと思われる模様に「レエスの模様」がある。それを詠った晶子の歌（「春の歌」一連の15首目）は、先にあげた歌群とはやや異なる、新しい傾向を示している。

ふらんす座夜の廊下をまぼろしに見よとてそめしレエスの模様

「レエスの模様」は、繊細な透かし模様である。しかも「そめし」であるから、刺繡でも織りでもなく、友禅のような染めで表現されている。そこに晶子は「ふらんす座夜の廊下をまぼろしに見よとて」という、序詞風の、印象的な比喩を配している。

晶子は明治45年（1912）の5月から大正2年（1913）の10月まで、約1年半におよぶ渡欧経験を持っているが、それは晶子の服飾観を大きく変え、また磨くものであった。

大正9年（1920）の「婦人の友」9月号に、パリで過ごした日々を回想した、「蟲干の日に」と題する、次のような詩を発表している。

蟲干の日に現れたる／女の帽のかずかず、／<sup>ヨオロッパ</sup>欧羅巴の旅にて／わが<sup>き</sup>被たりしもの。／お  
お、一千九百十二年の／<sup>パリイ</sup>巴里の<sup>モオド</sup>流行。／リボンと、花と、／羽飾りとは褪せたれど、／  
思出は古酒の如く甘し。／埃と黴を透して／是等の帽の上に／セエヌの水の匂ひ、／サ  
ン・クルウの森の雫、／<sup>ウイーン</sup>ハイド・パアクの霧、／<sup>ウイーン</sup>ミュンヘンの霜、維納の雨、／アムス

テルダムの入日の色、／さては、また、／バガテルの薔薇の香、／<sup>フランス</sup>仏蘭西座のいきれ、／猶残れるや、残らぬや、／思出は古酒の如く甘し<sup>14)</sup>。…

掲出歌に詠われた「ふらんす座」が、「レエスの模様」からの単純な連想によって導かれた一語ではないことが、この詩からもわかるだろう。詩に描かれているのは、晶子自身が、じっさいに1912年当時の最新流行の帽子—リボンと花と羽で飾られた帽子をかぶって坐っていた、いきれに満ちた仏蘭西座なのである。

前年に渡欧した夫、與謝野寛を追って、晶子がパリを目指して旅立ったのは明治45年(1912)の5月であった。同年、パリの地から「婦人画報」9月号に寄せた随筆「巴里の旅窓より」において、晶子は次のように記している。

汽車で露西亞や独逸を過ぎて巴里へ来ると、先づ目に着くのは仏蘭西の男も女もきやしやな體をして其姿の意気<sup>いき</sup>な事である。(中略)概して瀟洒と都雅<sup>あつさり みやび</sup>であることは他国人の及ぶ所で無からう<sup>15)</sup>。

自らの足で「巴里」に立ち、自らの目で「仏蘭西の男女」を見て、その姿から感じとったのが、「きやしや」「意気<sup>あつさり</sup>」「都雅<sup>みやび</sup>」等の感覚であった。

晶子が「百選会」の着物の「レエスの模様」から呼び覚まされたのは、実体験に裏打ちされた、これらの感覚だったのではないだろうか。そこから懐かしのパリが、仏蘭西座が、自然に思い出されたのである。

注目すべきは、「レエスの模様」が、そんな仏蘭西座の麗しいたずまいや華やかな舞台ではなく、「夜の廊下」をまぼろしに見るような心持ちで染められていることである。現代のような照明設備のない時代、夜の廊下のかもし出す風情は、影絵のように行き交う、きゃしゃな身体フランスの男女の美しさは、いかばかりであったろう。それをさらに「まぼろし」に見るとなれば、おのずから「レエスの模様」のはかなげな風情が、陰影を深めたものとして想像される。

「春の歌」より4年後、大正14年(1925)3月の第25回春の「百選会」においても、晶子は同じ夜の廊下に思いを馳せ、「<sup>ふらんす</sup>仏蘭西座その夜の廊に見し色を作る日となる<sup>をとめ</sup>東の少女」と、掲出歌の続編のような歌を詠んでいる。

『みだれ髪』の刊行から20年を経て、43歳になった晶子の、あらたな歌境である。

さらにもうひとつ「讚歌序」から読み取ることができるのは、「染織刺繍の技術に対しても新意を出だす」ために日夜努力を重ねている「図案家と工人」に敬意を表し、その労をねぎらおうとする晶子の思いである。「春の歌」の7首目の、次のような歌に、それが端的に現れている。

春の衣京<sup>きぬ</sup>の工人色糸にたそがれを織りあげほのを織る

晶子は生涯、生活力に乏しい夫とたくさんの子どもをかかえ、研究と創作に邁進した。そんな苦勞人、晶子ならではの配慮と言えるのではないだろうか。

### (3) 與謝野晶子の嗜好

與謝野晶子が「百選会」の顧問に就任したのは大正7年（1918）頃とされ、正確な年月日は特定されていない。しかしその発端については、高島屋の取締役を務めた川勝堅一が、往時を回想した随筆、『日本橋の奇蹟』に記している。それによれば、川勝が、岡田信一郎の紹介で九段の與謝野邸を初めて訪問し、寛・晶子夫妻に会って「百選会」の仕事を依頼したのは、大正6年であったという。紹介者の岡田とは、この5年後に大阪高島屋の設計を手がけた建築家である。川勝は晶子の印象について、次のように記している。

晶子先生は、その頃、クラシックなパリ調の洋装で、巾のひろい帽子をかぶった姿も見うけたが、元来キモノがお好きで、特に、むらさき色を好んで着ておられた。そうしたキモノ好きから、芸術的な流行キモノを創作する企画の「百選会」の趣旨に賛同され、毎年・春秋、ある時は夏にも開いたこともある、この百選会の出品審査会には必ず出席をされて、「消費者側の女性を代表したつもりで選びましょう」と、熱心に一つ一つ、染・織・刺繍・絞りとりどりのキモノの地色や模様を、いつも楽しそうに鑑賞しつつ、その、それぞれの品に因んだ、お歌をつくって頂いたものだった<sup>16)</sup>。

日ごろは和装の晶子も、時として洋装をしていたことがわかる。それも大正モダンの、アール・デコ調の洋装ではなく、「クラシックなパリ調の洋装で、巾のひろい帽子」である。それはおそらく、晶子がパリで求めたドレスと帽子であり、先に引用した「蟲干の日に」に詠われた、「一千九百十二年の／<sup>パライ</sup>／<sup>モオド</sup>巴里の流行。」であったと思われる。

また、歌を詠むのみならず「出品審査会」にもかかわっていた晶子の様子も見てとれる。「染・織・刺繍・絞りとりどりのキモノの地色や模様を、いつも楽しそうに鑑賞しつつ」という描写から、晶子の表情が伝わってくる。

かつて森鷗外は、『みだれ髪』の「浅き地に扇ながしの都ぞめ九尺のしごき袖よりも長き」等の歌を「絢爛中の絢爛」と捉え、書簡の中で、「三井大丸乃至三越のかきつけも亦是絢爛の筆にあらざるか」などと書いたこともあった<sup>17)</sup>。鷗外は周知の通り、與謝野夫妻の「新詩社」の支援者であり、夫妻との親交も深く、晶子の歌を正當に評価している。その鷗外にして、「三井大丸乃至三越のかきつけ」のようだと言わしめる要素が、たしかに晶子の歌にあるのも事実である。先に引用した「あてやかに咲ける銀糸の白蘭の花をおさへし錦繡の鳥」などは、まさに鷗外のいう「絢爛中の絢爛」の歌に数えられる。しかしそれこそが、「百選会」においては大いに生きる、「キモノ好き」の晶子ならではの詠風であるとも言えるだろう。

「キモノ好き」のほかにもうひとつ、晶子の嗜好として加えておきたいのが「百貨店好き」である。晶子は「女は掠奪者」と題する、次のような詩を書いている。

大百貨店の売出しは／どの女の心をも誘惑る、／祭よりも祝よりも誘惑る。／一生涯、異性に心引かれぬ女はある、／子を生まうとしない女はある、／（中略）／<sup>おほよ</sup>凡そ何処にあらう、／<sup>みつこし</sup>三越と<sup>しろきや</sup>白木屋の売出しと聞いて、／<sup>をど</sup>胸を跳らさない女が、／俄かに誇大妄想家とならない女が。……／その刹那、女は皆、／（たとへ半反のモスリンを買ふため、

／躊躇して、見切場に／半日を費す身分の女とても、)／その気分は貴女である、／人の中の孔雀である。／わたしは此の華やかな気分を好く。／早く神を撥無したわたしも、／美の前には、つつましい／永久の信者である。／(中略)／わたしは三越や白木屋の中の／華やかな光景を好く<sup>18)</sup>。

この詩の初出は大正6年(1917)12月16日の「横浜貿易新報」である。高島屋「百選会」の顧問になる以前の、晶子の心境が綴られている。詩の中で百貨店の代表としてあげられているのは、三越と白木屋であった。

詩はこのあと、大百貨店の敷居を跨ぐ女はみな、男に寄生し、その財力を奪う掠奪者であり、その名から脱するためにも働こうではないか、という方向へ進んでゆく。しかしその根底にある、「その気分は貴女である、／人の中の孔雀である。」、「わたしは三越や白木屋の中の／華やかな光景を好く。」という心情は、ゆるぎないものだろう。

ここで1つ注目しておきたいのは、世の多くの女たちにとっては、安価なモスリン(メリンス)をわずか半反買うのにも、半日を費やして逡巡しなければならない現実があることを、晶子が身をもって知っている点である。晶子は二十代のころの、「物質生活が極めて貧困であった時代」を次のように振り返っている。

わたくしは外出着に、冬は一枚の銘仙の羽織と、夏は縮の浴衣が一枚あつただけである。併しわたくしは、さう云ふ中で、歌の三昧に入つてしまふと、何事も忘れることの出来た幸福な時代であつた<sup>19)</sup>。

こうした心の持ちようが、「女は略奪者」における、神を払い除けても「美」の前には永久の信者である、という、いかにも晶子らしく勇ましい言挙げに通ずるのである。

「キモノ好き」「百貨店好き」という晶子の嗜好を支えているのが、見切り品を買う女の心情への共感であり、「消費者側の女性を代表」する心意気なのである。適材適所というべきか、先に述べた詠風を支える、これらの嗜好、資質があつてこそ、晶子は「百選会」の顧問に招かれ、20年の長きにわたって、その仕事を全うしたのである。

大正10年(1921)3月の第17回春の「百選会」が、晶子にとって詩歌発表のスタートであり、その内容はスタート時点から圧巻の充実ぶりを見せていた。晶子を顧問に迎えた高島屋にとっても、十分に満足のゆく働きであつたろう。

## 2 関東大震災以後の「百選会」

### (1) 第23回春の「百選会」

関東大震災が発生したのは、大正12年(1923)の9月1日であつた。京橋南伝馬町にあつた高島屋東京店の建物は全焼の憂き目に合う。與謝野晶子も、完成して文化学院に預けてあつた『源氏物語』の現代語訳の原稿が焼失するという、痛ましい体験をしている。

それらを乗り越えて開催されたのが、大正13年(1924)3月の、第23回春の「百選会」であつた。

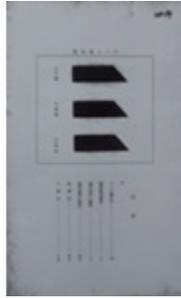


図1 第23回「百選会図録」  
左：表紙 右：流行色と目次  
(国立国会図書館蔵)



図2 第23回 新興花鳥模様 図案  
(飯田鐵太郎・野村悟編『百選会百回史』  
株式会社高島屋本社業務部1971年P10より転載)

図1の左が第23回「百選会図録」の表紙、右が流行色と目次である。この回の流行色は「やまと紫」「孔雀緑」「日出色」の3色、テーマは「新興花鳥模様」であった。震災からの復興を目指して、その象徴に掲げられた花鳥には、豊かな自然からエネルギーを得ようという願いがこめられている。図2が同回のテーマ、「新興花鳥模様」の斬新な図案である。晶子は「新花鳥」と題して、次の5首を発表している。

新花鳥

衣に染め思ひかはせる花鳥の優しき息に包まれて居  
新しき春に逢ひたる花鳥の想ひを染めん百種の衣に  
かぐはしく匂ふ未来とめでたかるいにしへを持つやまと紫  
ひんがしの日の出の色をわが帯の一端にだに置かまほしけれ  
今年より孔雀の鳥の緑をば人の少女も翅にすと聞く

晶子が「百選会」に寄せた歌のほとんどは歌集に未収録であり、そのことは、『与謝野晶子と百選会 作品と資料』<sup>2)</sup>の巻頭にも、「詩歌のすべては歌集等にも収録されておりません」と記されている。しかしあらためて晶子の歌集を読んでも、この「新花鳥」一連5首のうち、2首目と5首目は、第20歌集『瑠璃光』<sup>20)</sup>に収録されていることが判明した。

その初出は大正13年(1924)1月17日の「讀賣新聞」(第4面)であった。「百選会だより」と題して掲載された一連5首は、次の通りである。「新しき春に逢ひたる花鳥の想ひを染めん百種のころも。／衣に染め思ひかはせる花鳥の優しき息に包まれて居／かぐはしく匂ふ未来とめでたかるいにしへを持つやまと紫／ひんがしの日の出の色をわが帯の一端にだに置かまほしけれ／今年より孔雀の鳥の緑をば人の少女も翅にすと聞く。／高島屋の第二十三回百選会に因みて／—與謝野晶子女史作—」。「百選会図録」の「新花鳥」とのもっとも大きい相違は、1首目と2首目の歌が入れ替わっていることである。これは「新聞」という発表媒体を考えたとき、当然の配慮であると思われる。「百選会」を知らない一般読者にも、その概要が伝わるように、一首目に「想ひを染めん百種のころも」の歌を配したのであろう。

ここでおさえておきたいのは『瑠璃光』の歌である。晶子は「新花鳥」の2首を歌集に収録

するにあたって4箇所（「新しき」→「新しく」、「想」→「思」、「衣に」→「ころも」、「翅」→「羽」）を変更した上で、以下の歌群に入れている。省くことなく前後の8首をあげる。

紫の女の襟の中にまでしみとほりくる廢墟のさむさ  
 その日より夢見ることも忘れつれ春よおのれを新しくせよ  
 黄昏れてうすく仄かに霜降れば旅の空めき悲し東京  
 ありしのち家低くして海に似る都なれども春の日を抱く  
 新しく春に逢ひたる花鳥の思ひを染めん百種のころも \*  
 今年より孔雀の鳥の緑をば人の少女も羽にすと聞く \*  
 宵過ぎし雨をききつつ思ふなり奈落と云へるやはらかき闇  
 降りつづく雨の世界に身を置くもふさはしきかな悩ましくして

せっかくの紫色を装いながら、女の襟の中にまで、関東大震災で廢墟と化した街の寒さがしみとおってくる。夢見ることも忘れ、まるで旅の空のような悲しい東京。そんな都にも春は訪れる。しかしまたある時は、雨に降りこめられて奈落のような闇の底に沈んでしまうのだ。

「新花鳥」の2首に\*をつけてみたが、震災後の東京を描いたこれらの歌群に、まったく違和感なく溶け込んでいる。

そこであらためて、「新花鳥」一連5首を読んでみよう。1首目と2首目は、今回（第23回）のテーマである「新興花鳥模様」を詠っている。1首目の「思ひかはす」とは、互いに心惹かれ、恋しく思うことである。しかしながら花と鳥は、どんなに思いを深めようとも、現し世では交わることができない。その両者が、反物の表面に花鳥模様として染められ、着物（衣）に仕立てられることによって、永遠の居場所を得たのである。ここに至って花鳥は、「優しき息に包まれて」いるばかり、もう何も怖れるものはない。続く2首目は「新しき春」である。死者・行方不明者が10万人にもものぼった関東大震災から半年。厳しい冬を経て、生きて迎えた春である。1首目、2首目ともにおだやかな詠いぶりながら、そこに秘められた「想ひ」の深さには、底知れぬものが感じられる。

続く3首には、流行色が読み込まれている。3首目の「やまと紫」は赤みのある紫である。古より高貴な色として尊重されつつ、時代を越えて人気の紫は、晶子も好んで着ていたと、先の川勝堅一も記していた。「めでたかるいにしへ」を心ゆくまで咀嚼して、「かくはしく匂ふ未来」へ向って顔を上げる。悠久の時のはざまには幾多の試練もあるが、日本の色である「やまと紫」は永遠の希望の色なのだ。4首目の「日の出の色」は、新しい一日の始まりを告げる太陽の色である。このように呼ぶことで、赤い色が復興のシンボルのように思えてくる。着物や帯の全面を赤くすることは年齢的にも憚られるが、「帯の一端」であれば赤も置いてみたい、というのである。「わが帯の」と、自分に引きつけて詠むことで実感が増している。5首目はまず、「今年より」という初句に、はっとさせられる。未曾有の災害を乗り越えて「新しき春」を迎えた「今年より」、すべては再生するのである。「孔雀緑」は、孔雀の翅をともめのような青みがかった明るい緑。その緑を、「人の少女も翅はねにすと聞く」という表現には、詩情があふれている。

緑の翅は着物や帯の柄のようでもあり、髪飾りや、帽子の飾りのようにも想像される。

目に入るもの、風景、自然の風物、そこにはもちろん染織品も入るのだが、晶子はそうしたありとあらゆるものから発想を得て、一首の歌に、一篇の詩に昇華させてゆく。その鮮やかな手並みは天賦のものだろう。晶子が言葉を紡ぐ、その過程を垣間見ることのできる例に、大正4年（1915）5月30日の「讀賣新聞」に発表された、「庭の草」という詩がある。その後半をあげてみよう。

…／名をすら知らぬ草ながら、／葉の形見れば限り無し、／さかづきの形、とんぼ形、  
／のこぎりの形、楯の形、／ペン尖の形、針の形。／また葉の色も限り無し、／青梅の色、  
ひわちやいろ 鶉茶色、／緑青の色、空の色／それに裏葉の海の色。／青玉色に透きとほり、／地  
ろくしやう フランス 地にへばりつく或る葉には／緑を帯びた仏蘭西の／牡蠣の薄身を思ひ出し、／なまあたた  
かい曇天に／細かな砂の灰が降り、／南の風に草原が／のろい廻渦を立てる日は、／六  
くさほら うねり む 坪ばかりの庭ながら／紅海沖が目に浮ぶ<sup>21)</sup>。

創作に倦んでふと顔を上げたときだろうか、目に映ったのは庭の草である。名も知らぬ草の葉の形を観察するところから始まって、興味は葉の色へと移る。青梅の色、鶉茶色、緑青の色、空の色、海の色、青玉色。「百選会」の流行色の命名もかくやと思われる色の連鎖は、みるみるうちにはるか紅海沖へと至るのである。

「新花鳥」の一連において、晶子は今回のテーマ、「新興花鳥模様」を念頭に置きつつ、着物地や帯地に写された、自然のかもしれない出ず季節感から、花鳥の風情から、日の出の色から、想像の翼を自由に羽ばたかせている。そうして繰り広げられる歌の世界は、読者を十分に楽しませる。しかし「新花鳥」が読者の心を打つ訳は、そればかりではない。晶子の創作の根底に、震災の犠牲者を悼み、明日の復興へ希望をつなごうとする強い意志が、けっして声高ではないが静かな決意が、感じ取れるためなのである。弱者に寄り添って立つ、それが、創作における、晶子の立ち位置であるようだ。

## （2）第24回以降の「百選会」

関東大震災の後、大正末期の「百選会」は、また新たな展開を見せている。



図3 第25回

「新クロマ模様」

（『百選会百回史』P11.13より転載）



第26回

「ボン・トン模様」



図4 『新古典模様』



「志」



「四」

高島屋呉服店専職部編 芸艸堂 1926年

（神奈川県立図書館蔵）

大正13年（1924）10月の、第24回秋の「百選会」以降の「二科」のテーマは、24・25回が「新クロマ模様」（図3左）、26・27回が「ボン・トン模様」（図3右）である。クロマとは色の彩度のことで、「新クロマ模様」は、鮮やかな色の対比に重点の置かれた模様である。一方、「ボン・トン（bon ton）」とは良い調子という意味のフランス語で、「ボン・トン模様」は「クロマ模様」をさらにデザイン的に進化させたものであった。

流行色は、第24回は「コバルト紫・マロン紅・オリーブ緑・オレンジ朱」、第26回は「飛鳥紫・唐橘・トルコ朱・ペルシャ青」と、和洋混交の自由な命名である。

大正15年（1926）10月の、第28回秋の「百選会」のテーマは、「一科」が「絵巻趣味の新古典模様」、「二科」が「ラ・ヴィ（新生）模様」であった。この年、裾模様に特化した図案帳、『新古典模様』<sup>22)</sup>が刊行されている。「はしがき」に、「構図に配彩に目新しく優雅高尚而かも莊重味豊か」と記されている通りの内容であった。図4にその例を示したが、「壺」は斬新な富士の山容と裾野の風景であり、「四」は幾何学模様に取りめられた松竹梅である。富士も松竹梅も、モチーフとしては「古典模様」であるが、「新」の冠された「新古典模様」は奇想天外、その独創性には目を見張るものがある。

これらに対して、與謝野晶子は次のような歌を詠んでいる。

秋<sup>あはせ</sup>裕<sup>あはせ</sup>クロマ小紋を着たければあまたの色の思ひ出の湧く （第24回）

橄欖<sup>かんらん</sup>の森の夜明に逢ふこちせよと緑<sup>に</sup>を着る<sup>さん</sup>二三人

われは着んうす橄欖<sup>くわしや</sup>の華奢<sup>くわしや</sup>にしてすこし淋しきふらんす模様

三月のボン<sup>い</sup>トン模様かげろふを色に出だしてやはらかきかな （第27回）

春の月これはボン<sup>い</sup>トン唐草と云ひて大路の柳影おく

1首目の小紋とは、同じ模様が繰り返された全体模様である。クロマ模様ならではの色の美しさが、「あまたの色の思ひ出の湧く」と表されている。読者はこの歌を読み、また、「百選会」の会場でじっさいのクロマ小紋に触れ、百人百様の「思ひ出」を胸に浮かべることだろう。晶子は自らの思いを前面に出して1首を完結させてはいない。さあいかようにもあなたの気持ちに則して読んでくださいと、読者に対して扉を開いているのである。

2首目と3首目は、流行色の「オリーブ緑」が「橄欖」として詠われている。緑は難しい色であり、通常、赤系統の色を着るよりもむしろ勇気を必要とする。それを、「橄欖の森の夜明に逢ふこち」と、フランスの恋人たちのイメージをふくらませることで、おしゃれな憧れの色へと昇華させている。

4首目と5首目では「ボン<sup>い</sup>トン模様」が、やわらかな陽炎や、春の月と重ねて詠われている。特に5首目は、春の月が、芽吹いたばかりの柳の緑を「ボン<sup>い</sup>トン唐草」と呼び、その影を大路に置くという、幻想的な見立てである。

以上のように、関東大震災後の「百選会」は、さらに新規なものを求めて発展している。晶子はそれを正面から受けとめて、ますます自在に作品化するのであった。

#### Ⅳ おわりに

與謝野晶子は大正14年（1925）年3月の、第25回「百選会」において、25回の節目を祝って次の歌を詠んでいる。

極東の百種にじふごの美をば人選ぶ行事かさなる二十五かへり  
 鹿の子刺繡かりはくしほり摺箔すりはく古代をばひとり忘れぬ高島屋かな

1首目に詠われている通り、晶子にとって「百選会」の染織品は、「極東の百種の美」という認識であった。2首目の「鹿の子刺繡しほり摺箔」は、いずれも伝統の技法である。「鹿の子絞り」の緻密な美しさ、とりどりの色糸を用いた「刺繡」の豪華さ、「絞り染め」のやわらかで優しい味わい、金箔・銀箔の施された「摺箔」の絢爛さ。それらによって生み出されるのが、「極東の百種の美」なのである。

かつて晶子は「讃歌序」において、初めに「現代の生活ハ文化の実現に最上の価値を置く。」として、和装を1つの文化として位置づけた上で、「文化の意義の重要な一つハ、断えず人工(ママ)の美を創造して止まざること」であり、「染織刺繡の技術に対しても新意を出だすことハ、当然の努力」であると述べていた。いかなる技術も、単に守るだけではやがて衰退してしまう。常に新しいものを求め、向上を目指してこそ、技術は継承されて行くことを、晶子は熟知していたのである。

本稿ではここまで、晶子が高島屋「百選会」に寄せた大正末期の歌を読んできた。

その結果、晶子がどのような思いで「百選会」の歌を詠み続けたのか。また、それが高島屋に求められ、読者にも受け入れられた理由はどこにあったのか。その一端が明らかになった。

第1は晶子の志である。晶子は明治45年（1912）の5月から約1年半におよぶ渡欧経験をもち、帰国後の旺盛な評論活動においては一貫して、女性解放、女性の洋装化の必要性を主張した。しかし現実には、日本における女性の洋装化は遅々として進まず、今和次郎の「東京銀座街風俗記録」によれば、大正14年（1925）の時点でも、銀座を歩く男女のうち、洋装は、男性が67%であるのに対して、女性はわずか1%にすぎなかった<sup>23)</sup>。そうした時代にあって晶子は、女性の自立と洋装化という理想は理想として掲げながら、現実を見据え、継承すべき日本の「文化」である和装を、さらには染織刺繡の技術を守り育てようとした。その志、あるいは使命感とも言える思いが、「百選会」の仕事の続ける原動力となっていたのである。

第2は、晶子の嗜好と、歌人としての姿勢である。晶子はグローバルな視点を持ち、古典文学に明るく、染織品にも精通していると同時に、純粋に着物を愛し、百貨店を愛していた。これらの嗜好に加えて晶子に備わっていたのは、弱者の身になってものを見て、読者に寄り添う姿勢である。のびのびと詠いながらも、その姿勢を貫いて「百選会」に臨み、創作を続けたのであった。

高島屋「百選会」の顧問として、最適の人材であったと言えるだろう。

なお、Ⅲ2（1）で述べた通り、これまで「百選会」の晶子の歌は、いずれの歌集にも収録されていないとされてきたが、第20歌集『瑠璃光』に2首収められていることが明らかにな

った。本稿のささやかな収穫として付記しておく。

第27回春の「百選会」（大正15年）に、晶子の心情をよく表した1首がある。最後に引いて、この稿を閉じる。

目にも見よ声ききつけよひんがしの着物の国の幻想の曲

### 【註】

- 1) 飯田鐵太郎・野村悟編『百選会百回史』株式会社高島屋本社業務部 1971年
- 2) 高島屋資料館編『与謝野晶子と百選会 作品と資料』高島屋資料館 2015年
- 3) 青木美保子「大正昭和初期の服飾における流行の創出—高島屋百選会を中心に—」『デザイン理論』44号 意匠学会 2004年 pp1-17
- 4) 山本真紗子「戦前期の高島屋百選会の活動—百選会の成立とその顧問の役割—」『Core Ethics』9号 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年 pp233-244
- 5) 表田治郎「きもの讃歌—与謝野晶子と百選会」『民族藝術』30号 民族藝術学会 2014年 pp76-82
- 6) 今野寿美「与謝野晶子と百選会」『歌壇』本阿弥書店 2015年7月号 pp110-116
- 7) 大久保春乃『時代の風に吹かれて。—衣服の歌』1 与謝野晶子 北冬舎 2015年 pp11-74
- 8) 高島屋の創業から「百選会」創設までの歴史は、中井宗太郎「高島屋の創業とア・ラ・モード」（註1）pp1-3）に詳述されている。
- 9) 津田青楓『老畫家の一生』中央公論美術出版 1963年 pp92-93
- 10) 「百選会」命名の経緯は、「百選会とは」（註2）p10）において解説されている。
- 11) 「百選会」の変遷は、「百選会関連年表」（註2）pp12-14）にまとめられている。
- 12) 「百選会」における作品の製作過程については、木村重信「前衛的な百選会と与謝野晶子の貢献」（註2）pp149-150）に詳述されている。
- 13) 『流星の道』新潮社 1924年／『定本與謝野晶子全集』第4巻 講談社 1980年 p324
- 14) 『定本與謝野晶子全集』第10巻 講談社 1980年 pp114-116
- 15) 『巴里より』金尾文淵堂 1914年／『定本與謝野晶子全集』第20巻 講談社 1981年 pp540-541
- 16) 川勝堅一『日本橋の奇蹟』実業之日本社 1957年 pp197-201
- 17) 森鷗外「小金井きみ子宛書簡」1905年8月／『鷗外全集』第36巻 岩波書店 1989年 pp246-248
- 18) 『定本與謝野晶子全集』第10巻 講談社 1980年 pp296-304
- 19) 「與謝野晶子集の後に」『現代短歌全集』第5巻 改造社 1929年 p409
- 20) 『瑠璃光』アルス 1925年／『定本與謝野晶子全集』第5巻 講談社 1981年 pp63-64
- 21) 『定本與謝野晶子全集』第10巻 講談社 1980年 pp90-93
- 22) 高島屋呉服店専職部編『新古典模様』芸艸堂 1926年
- 23) 今和次郎「1925年初夏 東京銀座街風俗記録」／今和次郎・吉田謙吉著『モデルノロヂオ「考現学」』春陽堂 1930年／復刻版 学陽書房1986年 p3, p14, pp23-24